

情報共有

官邸班・NISA班 ← フォルダ対応

※ NISA 6室 お疲れ済

H23.06.04①議事メモ.doc Last printed 6/4/2011 8:11:00 PM

2

(7枚 = 非管理メモ)

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成 23 年 6 月 4 日 (土) 11:00~12:35

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 35 名 (カメラ 4 台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

## 配布資料：

- ・ 東北地方太平洋沖地震による影響などについて (6月4日午前9時現在)
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ (6月4日6時現在)
- ・ 福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺サブドレン水核種分析結果
- ・ 1号機 原子炉建屋内調査結果 (6月3日測定分)
- ・ 福島第一原子力発電所1号機仮設原子炉圧力計設置状況及び作業風景 (画像)
- ・ 1号機原子炉建屋内 ロボット撮影動画

## 質疑

Q. 一部報道で、1号機の水素爆発は非常用ガス処理系に水素ガスが逆流したことによって発生したという記事があるが、その可能性が高いという認識でよいか。

A. 可能性が高いか低いかはまだ評価できていない。漏えいのルートとしての可能性はあると思うが、引き続き、配管・弁の設計、弁の開閉状態を確認していく。

Q. 電源喪失によって弁が開放していたということは事実か。

A. 当該ルートには、空気で作動する弁が直列で二つつながっている。電源喪失した際に、上流側の弁が開いたのか閉まっていたのかは、確認する必要がある。

Q. 現在、弁の状態はわからないということか。

A. 当該ルートでは、事故時に自動起動した後、津波により電源が喪失した。その際、下流の弁は開、上流側の弁は閉だと思うが、設計などを含め確認中である。

Q. 通常は逆流防止の弁があると聞いているが、そういった設備はないのか。

A. 2、3号機に関してはダンパーという逆止弁がついているため、逆流しにくい構造になっている。

Q. 1号機は設計上ミスがあったということか。

A. 設計上のミスということより、1号機についてはベントをする際に非常用ガス処理系の下流の弁を閉めるという手順になっているが、今回電源を失ってその操作が出来なかったということだと思っている。

Q. 空気で作動する弁であれば、電源喪失と関係がないのではないか。

A. 圧縮した空気を作るコンプレッサーの電源が喪失し、空気が抜けてしまえば作動で

きない。

Q. 1号機原子炉建屋から湯気が出ているということは床を貫通している配管が損傷しているということか。

A. 配管が損傷しているということではない。

Q. 圧力抑制室が損傷して1階まで湯気が出ているということか。

A. 圧力抑制室の損傷の程度は不明だが、圧力抑制室からは、これまでも原子炉建屋地下への漏水があるので、この部屋にある程度の水はありその湯気が1階へ来ている可能性はある。

Q. 圧力抑制室の温度による湯気ということか。

A. その可能性もあると思う。

Q. 原子炉建屋の調査で測定した3,000~4,000mSv/hは圧力抑制室からの湯気の影響か。

A. 圧力抑制室の湯気の影響か、中性子計測管の収納室の壁の裏からの影響を受けている可能性があると思う。

Q. 3,000~4,000mSv/hの場所では、どのような作業を予定していたのか。

A. 現時点で周辺での作業予定はないため、蒸気はすぐに影響があるというわけではない。当面はこの状況を継続監視する。

Q. 本日、2号機原子炉建屋へは、何名の作業員で入城し、どのような作業を予定しているか。

A. 社員2名で11時25分に入城しており、作業としてはダストサンプリング・温度・湿度の測定を予定している。

Q. 2号機原子炉建屋の作業環境が改善されたと考えて良いか。

A. まだ詳細は分からない。使用済燃料プールの温度が33℃まで下がっているものの、換気をしたわけではないので、湿度は依然として高いと考えている。

Q. 昨日、保安院の発表した未公表のデータの中で、ベント開始前に、周辺地域でテルルが検出されていたというデータがあるのだが、どういう要因が考えられるか。

A. 燃料が損傷し始めた時点だったので、その影響があったかもしれない。通常の排気筒からの経路では無いと思うが、水素が建屋内に溜まっていたということもあるので、放射性物質が一部建屋から抜けていった可能性もある。

Q. 1号機原子炉建屋で発見された湯気は、今後の作業に影響するか。

A. 湯気の影響は付近の場所に限定されており、大物搬入口などまでは影響はなく、原子炉建屋内の作業に影響はないと思う。

Q. 1号機原子炉建屋大物搬入口付近の温度が27.3℃と高くなっているが湯気の影響か。

A. 外気の影響か湯気の影響かまでは判断できていない。

Q. 今回なぜ1号機原子炉建屋南東を調査したのか。

A. 5月13日に、測定結果の一部で2,000mSv/hと高線量だったため、具体的に何が高線量かを調べるためである。

Q. 1号機原子炉建屋南東にある機器ファンネルとは何か。

A. 機器の点検や配管の水抜きをする際に排水を受ける直径約30cm円筒形の漏斗のようなもの。

Q. 機器ファンネルは湯気が出ているところから近いのか。

A. その通り。

Q. 先日250mSv/h以上の被ばくした作業員2名について、放医研はマスクの着用が十分でなかったと指摘しているが、マスクを着用していたかの調査の進捗はどうか。

A. 3月11日から一部屋外の作業では装着しており、中央制御室でも装着していたと聞いているが、装着の中で外したことがあったのか、無かったのか実態を調査している段階。

Q. 被ばくした2名に中央制御室に非常用のマスクは常備されているのか。また非常時にマスクを装着する訓練はしていたのか。非常時のマニュアルはあるのか。

A. 中央制御室にはマスクないが、管理区域に入域する防護服を用意しているサービスビルの1階にあり、中央制御室とも近い。火災の観点からセルフエアセットについては中央制御室に常備している。マニュアル・運用方法として、どういった状況でマスク・セルフエアセットを着用することになっているかについては確認させていただく。

Q. 現場の指示が調査対象となっているという認識で良いか。

A. マスクの着用、また当時現場の環境をどのように認識していたかが調査対象になっている。

Q. 外部線量が高く、小名浜のホールボディカウンターの検査にかかった40名の中に、内部被ばくで156mSv作業員がいるということだが、その作業員の外部線量は。

A. まだ判明していない。

Q. 内部被ばくで156mSv被ばくした作業員の年齢や作業内容など詳細を教えて欲しい。

A. まずは高線量の被ばくが判明した2名の調査を優先的に進めている。どのような作業していたか、また当時中央制御室にいた作業員130人についても調査を進めている。

Q. 内部被ばくで156mSv被ばくしたということはホールボディカウンターで判明したのか。ホールボディカウンターでは何が分かるか。

A. WBCでは計測値としてcpmが分かる。小名浜のWBCではおよそそのcpmからmSv/hへの換算しかできないが、JAEAでの検査では、エネルギー単位での精密な計測が可能であり、判明したBq数から、被ばく線量を判定できる。

5

- Q. 1号機原子炉建屋で湯気が出ている部分の線量で4,000mSv/hが測定されているが、この値は原子炉建屋で測定された線量で最高の値か。
- A. 空間線量率では最高である。
- Q. 1号機に逆流防止用の弁が無かったことは設計ミスに該当するのかわ。
- A. 設計上のミスかどうかについては今後の詳細な調査が必要であると考えている。手順に従えば、格納容器のベントを実施する際は非常用ガス処理系の下流にある弁を手動で閉めることになっていたもので、そういったことであれば逆流することはないような方法になっていた。しかし、電源喪失の際も想定しておくべきかどうかは今後の評価が必要であるが、非常用ディーゼル発電機を中心とする非常用電源が今回のような事故の際にどこまで維持されるべきかというそもそもの評価が必要であると考えている。
- Q. ベント弁は、電動弁と空気作動弁が二つあると聞いたが、どのように操作したのかわ。
- A. 格納容器のベントを実施する際に運転員が手動で開けている。空気作動弁はエンジンコンプレッサーやバッテリーを持ち込んで操作している。
- Q. 1号機のベントの際、非常用ガス処理系の空気作動弁は、本来閉めなくてはならないものを閉められなかったということか。
- A. 非常用ガス処理系の空気作動弁については、同系統が運転中であれば開いており格納容器ベントの際は当該弁を閉める必要があるが、駆動用の空気が無い状態であったので閉めようと思ってもなかなか閉められなかったものと推定しているが、事実関係については、今後、聞き取り調査等ふまえて引き続き時系列をまとめたいたいと考えている。
- Q. 本来、閉めなければならない弁が開いていたにもかかわらずベントしたということか。
- A. 開いているか閉まっているかについても中央制御室では分からなかったということ。
- Q. これらの弁は開いたまま。
- A. 電源が失われた場合は設計上開いたまま。
- Q. 非常用ガス処理系の弁は閉めるには何が必要か。
- A. 電動弁を操作するためのバッテリーと空気作動弁を開ける圧縮空気が必要である。
- Q. そのような状態でベントを実施して良かったのかわ。
- A. 格納容器の圧力が既に設計圧力の2倍を超えていたので、格納容器ベントが必要だったと判断した。
- Q. 高い圧になっていた、当初説明のあった通り、フランジ部から、ベントする際に圧力が高い、説明の整合性は。時間がかかっている。
- A. ベントに時間を要したことについては、建屋内が電源が無くなり暗く、線量も高い状態で、現場では必死に作業をしていたものと考えている。その際に非常用ガス処理

系からの水素の回り込みをどう処理するかということよりも、格納容器のベントを優先したものと考えている。

Q. 既に大量の水素がオペレーションに溜まっている状態で、ベントによって爆発したと朝日新聞には記載されているが、どのように考えるか。

A. 現時点では、格納容器のフランジやシール部等の箇所から原子炉建屋側に水素が漏れて、原子炉建屋最上階に溜まったと評価しているが、事故の最中に同じような予測まではしていなかったと思う。最終的には事故調査委員会の判断になるが、当社としては現時点で格納容器ベントを最優先させたものと考えている。

Q. ベントによって水素爆発が起きた可能性が高いということか。

A. 非常用ガス処理系に逆止弁がある3号機も爆発していることを考えると、非常用ガス処理系に水素が回り込んだことが主原因かは調査が必要であると考えている。

Q. 朝日新聞の記事には「線量が高いため、非常用ガス処理系の出口弁の開閉の確認ができなかった」と記載されているが、事実か。

A. 事故当時は現場の線量が高い状態が続いていたので、現場に行って弁の開閉状態を確認することは困難であったと思っている。

Q. 1号機原子炉建屋で湯気が確認された箇所は通常はゴム状のもので覆われていると、いうことでいいか。隙間が開いた原因は。

A. 材質としてはゴムである。ゴム状のものなので、可能性が全くないわけではないが地震の震動によって損傷したとは考えがたい。格納容器の圧力や温度が上昇し、亀裂や緩みが出て漏れたことはあり得るものと考えている。いずれにしても、線量が高く人が近づいて確認できる状態ではないので、ロボットによって監視することになる。

Q. 1号機の水素爆発は、現時点で、非常用ガス処理系と格納容器の隙間から漏れたことと、どちらの方が可能性として高いのか。

A. 非常用ガス処理系のルートも否定できないが、現時点でどのルートがどれだけ寄与しているかは確認できていない。

Q. 水素が原子炉建屋に溜まった原因として、非常用ガス処理系のルートについて今まで説明してこなかったのはなぜか。

A. 格納容器の圧力と温度が上がり貫通部やフランジのシール部が弱くなり、原子炉で発生した水素が抜けるルートは一番最初に想定されるルートであると考えている。非常用ガス処理系のルートはベントをした際は排気筒側のルートの方が流れやすいと考えており、開閉状態については現時点で調査中であり未確定の要素があったため。

Q. 他にも考えられるルートはないか。

A. 現時点で他に考えられるルートはない。

Q. 1号機原子炉建屋で湯気が出ている箇所の空間線量は4,000mSv/hに上がった原因は。また、サブプレッションチェンバーの温度が51度でもこのくらいの湯気が出るのか。

Q. 5月13日に入域した際は、ロボットで見る限りでは湯気は確認できていない。状況の変化については不明であり、原子炉建屋地下の水位が下がっているが、これが原因かどうかは確認できていない。

A. 外気温が20～30℃なので、51℃でもこの程度の湯気は発生するものと考えている。

Q. サプレッションチェンバー自体が損傷しているのか、それともその周辺が壊れているのか。

A. 原子炉建屋に水が溜まっているので、サプレッションチェンバーにも何かしらの貫通ルートがあると思っている。

Q. 昨日公表した250mSvを超えた作業員の甲状腺被ばくの線量は。

A. 甲状腺の線量については確認させていただく。

Q. 現在、ホールボディカウンターで確認できている人数は。

A. 3月の作業員3,700名のうち、1,422名が小名浜もしくはJヴィレッジでの一次評価が終了している。その中で線量が高い方はJAEAで精密検査を受けることになっている。

Q. 線量が確定したのは何名か。

A. 評価が確定しているのは3月の時点で100mSvを超えていた21名と女性の19名で、合計40名。

Q. ホールボディカウンターの測定時間ほどの程度か。

A. 測定自体は約10分程度であるが、測定結果が出るのは1週間後になる。

Q. 250mSvを超えた作業員と同様の作業をしている者が130名程度いるとのことであるが、6月中ではなく、もっと早く評価できないのか。

A. 測定結果の評価に時間を要することと、聞き取り調査との突き合わせも必要であることから少し時間が必要であると考えている。しかし、一次評価の段階で高い値が出た方については優先的に調べる必要があると考えている。

Q. 1号機で湯気が出ている付近にある不活性ガス系配管の役割は。

A. 格納容器中の窒素を封入する際に使う配管。原子炉を起動する時は窒素を入れ、停止して格納容器に空気を満たす際は窒素を出す配管。

Q. この配管の中には炉水が入っている恐れはないか。

A. 格納容器の開口部は気相部分になるため、炉水が入っている恐れはないが、格納容器の上部まで水没した場合は、この配管が水で満たされている可能性はある。

Q. 発生している湯気のサンプリングは実施するのか。

A. 湯気自体というより、付近のダストをサンプリングする可能性はあるが、水滴があるので、どの程度影響があるかは確認が必要である。

Q. 3号機の圧力容器下部の温度が157℃まで上昇しているが、炉内への注水量も含めてどのように評価しているのか。

A. 温度は上昇しているが、他の温度が落ち着いているので、その点もふまえて総合的に判断する必要があると考えている。

Q. 何度まで上がると流量を増やすといった目安はあるのか。

A. 温度は300℃程度まで耐えられるが、今のところ11.5m<sup>3</sup>/hを継続していきたい。

Q. 以前公開されたホワイトボードの記載内容には非常用ガス処理系の操作実績は記載がないが、他に何か記録が残っているのか。

A. 電源がないため機械的な記録はないと思われる。また、非常用ガス処理系の流量計も電源が落ちているので、パラメータのデータも失われているものと思われる。現時点では運転員への聞き取りを中心に調査を進めている。

Q. 運転員は、非常用ガス処理系に水素が逆流するという認識があったうえでベントの操作をしたのか。

A. その点については現時点で不明である。アクシデントマネジメントの手順に従うとベント実施の際には非常用ガス処理系の空気作動弁を閉めることになっていたが、閉閉状態が確認できない状態にどう判断したのかは確認中である。

Q. 非常用ガス処理系に水素が逆流したかどうかの調査はどのように実施するのか。配管のサンプリング等を実施するのか。

A. 物的な証拠を探すのは時間が必要であると考えている。事故調査委員会では聞き取り調査を含めた操作実績やパラメータ等で分かっているデータを提示することになるが、配管を切断して中をサンプリングすることは時間が必要だと思っている。

Q. 以前公開したホワイトボードの記載内容を見ると、非常用ガス処理系の空気作動弁閉まっているという記載がないが、実際は確認したのか。

A. 確認をして書かなかったのかは現時点で不明である。当時、情報共有のためにホワイトボードに情報を記載しているが、その際に必要な情報を全て記載していたかどうかは不明である。

以上

情報共有 非管理メモ

2

6枚

## プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成 23 年 6 月 4 日 (土) 18:30~19:30

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 35 名 (カメラ 3 台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

原子力運営管理部

広報部

## 配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所の現状
- ・ 福島第一原子力発電所に滞留している高い放射線量が検出された排水の集中廃棄物処理施設への移送に係わる報告書の提出について
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について (第七十一報)
- ・ 福島第一原子力発電所付近の海水からの放射性物質の検出について (第七十三報)
- ・ 福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水中に含まれる放射性物質の核種分析の結果について (6月3日採取分)
- ・ 福島第一原子力発電所タービン建屋付近のサブドレンからの放射性物質の検出について
- ・ 福島第一原子力発電所構内における土壌中の放射性物質の核種分析の結果について (続報 15)
- ・ 福島第二原子力発電所 プラント状況等のお知らせ (6月4日午後3時現在)
- ・ 福島第一原子力発電所モニタリング結果 他
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ (6月4日12時現在)
- ・ 福島第一原子力発電所水処理システムの概要

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

## 質疑：

Q. 2号機原子炉建屋の湿度が下がっていないがどう評価しているか。

A. 2号機使用済燃料プール水温が低下してからまだ3、4日程度であることから、建屋全体の湿度が低下するのは、時間がかかるのではないかと考えられる。またプール以外に地下の溜まり水からも蒸気が発生していると思われる。

Q. 2号機原子炉建屋の湿度低減に向けての対策は。

A. 湿度に関して引き続き状況を観察する。またアララベンチでのダスト除去を検討するが、湿度が高い場合はヒーターを使用して湿度を除去したいと考えている。

Q. 2号機原子炉建屋での今後の作業予定は。

A. まだ原子炉建屋内で十分に作業を行えるような環境ではないので、ダストや湿気等の改善後、具体的なスケジュールを検討したい。



Q. 水処理システムの運用開始は6月15日でよいか。またどこに溜まっている汚染水を最初に処理する予定か。

A. 評価書上は6月15日からだが、具体的な運用開始日が15日から前後するかどうかは未定であるが、前倒しする可能性はある。どの汚染水を優先的に処理するかは未定だが、プロセス主建屋か雑固体廃棄物減容処理建屋の溜まり水を処理することになる。

Q. 1号機炉内計の校正後の実績はどうだったか。

A. プラントパラメータの原子炉圧力A系の0.025MPagが校正後の数値。

Q. 圧力計校正前と校正後との数値の変化は。

A. 校正前は1MPa以上と高い値を指示していたことから、計器が故障していたのではないかと考えている。B系についても若干数値が高めに推移していることから、今回校正した圧力計の値が真値に近いと考えている。

Q. 1号機をベントした際に非常用ガス処理系の上流側の空気作動弁が閉まっていたとのことだが、現場の作業員に確認したのか。

A. 現場に確認した訳ではなく、設計上、電源を喪失すると上流側の空気作動弁が自動的に閉まる仕組みになっているもの。

Q. ベントの手順書では、空気作動弁を閉まっている事を確認した後ベントをすることになっているはずだが、作業員は電源喪失により空気作動弁が閉まっていることを認識でベントを実施したのか。

A. 下流側の空気作動弁は手順書上閉めることになっていたが、作業員が弁を閉じていることを確認してベントを実施したかは調査中である。

Q. 1号機の水素爆発の原因は、当初からの見解通り格納容器シール部の損傷部分から水素が漏れて水素爆発に至ったと考えているのか。

A. その通り。現時点では、1号機は設計上、非常用ガス処理系の上流側の空気作動弁が電源喪失の際に閉まる仕組みになっており、逆流する可能性は低いと考えている。

Q. 1号機のA系の圧力計が0.025MPagだが飽和蒸気は何度になるのか。

A. 圧力に対する飽和蒸気の温度を確認する。

Q. ゲージ圧と大気圧の差が小さいように思われるが、圧力容器と格納容器がつながっているのではないか。

A. ゲージ圧が大気圧を0.025MPa上回っていることから、圧力容器内に蒸気が溜まっていると思われる。従って圧力容器に大きな穴が開いているということはないのではないかと考えている。

Q. 2号機原子炉建屋の湿度が99.9%とのことだが、福島事務所での公表値は、99%だったが、どちらが正しい数値か。

A. 99.9%。

Q. 1号機のベントに関連して、非常用ガス処理系にある2つの空気作動弁のうち、ひとつは電源を喪失すると開き、ひとつは閉まるとの事だが、なぜそのような仕組みなのか。両方とも閉まる仕組みであれば良かったのではないか。

A. 設計上の考え方は確認する。

Q. プロセス主建屋への滞留水の移送に関し、追加分の1,500m<sup>3</sup>は全て2号機タービン建屋の溜まりを移送するのか。

A. まずは2号機タービン建屋の溜まり水を移送するが、1,500m<sup>3</sup>分を全て2号機の溜まり水に使うかどうかは、3号機タービン建屋の溜まり水の推移の状況を注視しながら判断する。

Q. 仮に6月15日に水処理システムが稼働できなかった場合の対策は考えているのか。

A. 1号機復水器や高温焼却炉建屋地下への移送を考えている。高温焼却炉建屋への移送の際には、保安院への報告書の提出が必要になる。

Q. 港湾内の物揚場前海水において、セシウム濃度限度を超えているが、ストロンチウム等その他核種についての調査は実施しているか。

A. サンプルングから3週間程度分析に時間を要するが、定期的には実施している。

Q. 物揚場に船を接岸したり、バラスト水を取り入れると放射性物質に船が汚染されるのではないか。

A. 資材の搬出入については、バラスト水の取り入れが必要ない船を使用している。また入港する際には、船の先端部に汚染物質が付着することが予想されるが、航行中に拡散すると考えている。

Q. 水処理システムで汚染水の浄化をすると廃液ほどの程度残るのか。

A. 25万m<sup>3</sup>の汚染水を処理した場合、約2,000m<sup>3</sup>の残渣が残ると評価している。

Q. 2号機でのダストサンプリングを実施した際のデータはどうだったのか。また2号機原子炉建屋内で作業をするためにどの程度環境改善をする必要があるか。

A. 温度は34度～35度。酸素濃度は21%。環境改善の具体的な目標は未定だが、セルフェアセットの必要がない10<sup>-2</sup>～10<sup>-3</sup>のオーダーにしたい。ちなみに4月18日に入域した際には、温度が34～41℃、湿度が94～99%。5月26日については、温度が32～37℃、湿度が99.9%であった。

Q. 5月25日に汚染水移送先の容量を5,000m<sup>3</sup>に引き上げるとしていたが、今回の報告書の中では、プロセス主建屋で1,500m<sup>3</sup>と当初の計画より少なくなっているが、この理由は。

A. 汚染水の受け入れ容量として、プロセス主建屋で4,000m<sup>3</sup>、雑固体廃棄物減容処理建屋で1,000m<sup>3</sup>であり、トータルで5,000m<sup>3</sup>と判断しているが、地下水の水位の関係もあり、まずは安全な範囲で1,500m<sup>3</sup>と報告させていただいた。今後、溢水のリスクが高まった場合については、更に2,500m<sup>3</sup>はサブドレン水位から90cm下まで移送す

ることも可能であるが、その際には貯蔵計画を保安院へ提出する必要がある。

Q. 今回提出した汚染水移送に関する報告書について、保安院からの指摘事項はあったのか。

A. 特にコメントはいただいている。

Q. ベントラインの上流の弁が閉まる条件は。

A. 電源喪失時に空気の作動圧力が無くなると閉となる。

Q. 2, 3号機も同様の仕様となっているのか。

A. 同様の弁が付いており、更に逆止弁が設置されている。逆流するリスクは1号機と比較して小さいと考えている。

Q. 今回、弁が閉まっているということ現場に直接確認したのか。

A. 当該弁の最新の点検記録について、本店と福島第一原子力発電所にて一緒に確認を行った。

Q. 点検記録を見ないと判断できないのか。

A. 最新の点検記録に記載されている弁の仕様を確認した。古い記録の場合、交換されている可能性があるため最新の記録を確認している。

Q. 水処理システム全体の設置レイアウトもいただきたい。

A. 準備したい。キュリオン吸着塔は焼却工作建屋、除染装置はプロセス主建屋南側、淡水化装置は屋外に設置する予定である。

Q. 保安院が昨日公開したデータの中で3月12日にテルル132を検出したとの報告があったが、この物質は原子炉が通常稼働している場合は出てこない物質なのか。

A. 核分裂生成物であり、燃料被覆管の中に閉じこめられている物質である。1号機については3月11日夜に燃料損傷した結果、大気中に放出されたものと考えている。

Q. テルル132は飛散しやすい物質なのか。

A. 特に飛散しやすい性質があるわけではなく、粒子等と一緒に風で飛ばされることが考えられる。

Q. 今回のテルル132の検出は誤検出という可能性はないのか。

A. 現時点では判断しかねるが、核分裂生成物の1つであり、セシウム等と一緒に外に漏れ出た可能性がありえると考えている。

Q. 検出した数値に対する評価は。

A. 数値の意味合いについては評価が必要と考えている。

Q. テルル132が炉内から漏れた経緯として考えられる経路は。

A. 核分裂生成物も水素等と同様、格納容器のシール部等から原子炉建屋にでてきた

と考えている。

Q. 格納容器のフランジやシール部分からも放射性物質は漏れることがあるのか。  
A. 細かい粒子等であれば漏れる可能性がある。

Q. これまで説明されていない破損等があるのではないか。  
A. 津波発生後の状況について詳細に解析することで漏れたルートが判明してくると考えている。

Q. テルル132が2, 3号機から漏れた可能性はないのか。  
A. 3月12日のデータであるため、その時期に1号機については炉心損傷が発生しており2, 3号機については注水が実施されていたので、1号機由来の可能性が高いと考えている。

Q. 作業員がドクターヘリ搬送されたとの情報があるが、事実関係は。  
A. 2名の作業員が搬送されている。1名は広野火力でボイラー点検をしていた人間が腰を強打し骨折した可能性があるとのことで病院に搬送された。医者の判断でドクターヘリにて郡山に搬送した。もう1名は集中廃棄物処理施設で現場監督をしていた作業員が病院の診察を受けるためにJビレッジに移動し、その後ドクターヘリにて総合磐城共立病院に搬送した。

Q. 至近の点検記録の確認を実施したとのことだが、何時の記録を確認したのか。またその内容は。  
A. 2010年3月15日～16日の定期検査時の記録を基に、弁の仕様上の性質を確認した。

Q. 今回の報告書の結果より1,500m<sup>3</sup>移送できるとのことだが、先日6月20日までに汚染水の受け入れ先の容量が4,000m<sup>3</sup>を超えるという見積もりをしていたが、今回の結果から4,000m<sup>3</sup>を超えるまでに更に3日間の余裕が出来たという理解でよいか。  
A. 6月3日に汚染水移送計画について報告させていただいたが、その中のケース1に該当する。結果としては20日で容量が満タンになることに変わりはない。

Q. 内部被ばく線量が250mSvを超えた作業員が更に3名いるとの報道があるが、事実関係は。  
A. 現時点でそのような事実は確認していない。

Q. プロセス主建屋での体調不良者は何歳なのか。また熱中症が原因なのか。  
A. 40歳代。現在、総合磐城共立病院に搬送されているが、診断結果は出ていない。

Q. 体調不良者発生経緯について、時系列で教えていただきたい。  
A. 6月4日午前9時頃にプロセス主建屋1階で現場監督を行っていた際に体調不良を訴えた。その後西門休憩所に行き、発電所の医師が診察を実施した。その後10時53分に業務車でJビレッジに移動し医師の診察を受けた。11時46分にJビレッジ

7

から広野グラウンドに移動し、12時6分にドクターヘリで総合磐城共立病院に搬送された。

Q. 当該作業員は何時から働いていたのか。

A. 確認させていただく。

以上